

心に寄り添う看護

テレビもネットもコロナのニュースで溢れている中、一枚の写真と出会った。防護服に身を包んだ医師が「家に帰りたい」「妻に会いたい」と涙する1人のお年寄りを抱きしめている写真だった。戦場と化した集中治療室で昼夜を問わず治療を続ける医師が患者を包み込むように抱きしめるその姿を目にして、医師と患者という関係を越えた人間の温かさと優しさを感じ、自然と涙が流れた。この写真を見て、自分が目指す看護師像を改めて考えさせられた。

新型コロナウイルスという未知な感染症により、今まで当たり前だった日常が180度変わってしまい、当たり前ではなくなった。家族や友人達と過ごす何気ない日常がどれだけ幸せで尊いことだったのかを思い知らされた。

父母の勤める介護施設でも面会は窓越しでしかできず、手を握り、触れ合い、ぬくもりを身近に感じることもすらできないと聞いた。命に終わりが近づいていても、そばで寄り添い、看取することもできないという。病院や施設に入られている方の心のよりどころは、医療従事者なのかもしれない。治療の場でありながら、同時に求められる心の安らぎの大切さ。ひとことに「看護師」と言っても本当に奥が深く学ぶことが沢山あるように思えた。

新型コロナウイルス感染拡大防止で病院実習から校内実習に変わった。校内実習だからこそ学べたことが沢山あった。しかし、唯一学べなかったことがある。それは、患者さんを思いやる気持ちや共感する気持ちなど、寄り添う看護について学ぶことである。これは、実際に患者さんと触れ合い、患者さんと一番近い場所でコミュニケーションをとることで生まれてくるものだと思う。今私は看護の知識や技術を学ぶことに一生懸命になっている。そんな私は、看護の基本である「看護の心」から少し離れていっている気がする。もちろん、知識と技術も大切である。しかし、一番大切なことは、患者さんに寄り添う心である。そんな気持ちから少し離れている私に、これから医療に携わるものとして、絶対に忘れてはいけないことをこの一枚の写真が教えてくれた気がした。医師がお年寄りを抱きしめるこの写真が全てを物語っているような気がした。

私の看護師像は患者さんの心に寄り添える看護師である。いつかあの医師のように、全てを包み込むような愛と優しさを持った看護師になれるといいなと思った。

この一枚の写真に出逢えて良かった。患者さんを抱きしめる医師の姿は私の心の中に一生残るだろう。